



## 1. 学校に問題がない!?

『アフタースクール』(2008)という映画がある。『運命じゃない人』(2005)『鍵泥棒のメソッド』(2012)で、すっかり人気監督のひとりとなった内田けんじ監督の映画で、作品の評価は高く、あれこれ受賞もしている。主演は大泉洋、佐々木蔵之介、堺雅人。

ぼくは元々映画に関してはメジャー好みで、大きな賞をとったりした映画は素直に感動する。それなのに、この映画だけは、どうしてもいただけないという後味が残って、この映画が誉められるなんて、困ったものだなあと感じてしまったものだった。

この映画で有名なのはラストの大泉洋の台詞だ。彼は自分の母校で教えている中学の先生という設定になっているのだが、彼が、警察につかまって、連行されていく佐々木蔵之介に向かって、「あのな、お前みたいな生徒、クラスにひとりくらいいるんだよ。全てわかったような顔をして、学校がつまんないのだ、何だのって。学校なんてどうでもいいんだよ。お前がつまんないのは、お前のせいだ」と偉そうに言う。ネットのレビューを見ていたら、「こういう台詞に女はしびれてしまうのよ」と書いていた、女性のユーザーがいた。

だけど、ぼくはこの台詞があるゆえにこの映画が大嫌いな映画となった。だって、俺は、大泉のいう「クラスにひとりくらいいる、学校がつまんないだのなんだの言っている」少年だったからだ。こんな台詞を出されたのでは、俺自身が否定される。でも、いや、おそらく俺の見方が間違っているのだろう。大体、この映画は教育問題を訴える映画ではない。

トリックの面白さを堪能させるミステリーだ。したがって、この台詞も、教育云々を議論するために発せられるものではないのだ。

そのことがわかっているとしても、俺は、こういう台詞には激しい反応を示さずにはいられない。学校に問題がないなんて、絶対に嘘なのだもの。

## 2. ボール投げのトラウマ

16歳になろうとしていた頃だ。高校に行かなくなって1年が過ぎ、さすがに2年も休学するわけにもいかない。通信制の高校に鞍替えすることになった。思えば、不登校になったの最初の1年間は、血の涙、嵐のような日々だった。両親も相当苦しんだ。でも、もう他に選択肢がない。藁をもすがる思いで、通信制の高校に入学することを決めた。その手続きのために、母が中学に電話した時のことだ。ぼくの中学3年の時の担任の女の先生が出られて、こうおっしゃったのだそうだ。

「國友君が学校に来なくなったっていう話。実は数ヶ月前に聞きました。同じ高校に入ったS君とN君が学校に遊びに来て、『先生、國友君、来なくなったんだよ。来るように言ってください』とっていました。」

S君もN君も優しい、いいやつだった。しかし、人気者で、スポーツもできて、いじめられっ子でもない彼らには、ぼくが何故、学校に来なくなったのか。その理由が想像すらつかないのだ。「もっと早くに相談しておけば、よかったですね」と電話口で先生はおっしゃったのだそうだ。

この連載にこれまで何度か書いてきたとおり、ぼくは小学校の高学年からジェンダーに

対する抵抗を示すようになっていた。中学3年の時に、例の体育教師による裸教育が始まり、ぼくの心はいっきに崩れていった。成績が一気に落ちたので、この担任の先生は、当時、「I先生に相談して見られますか。いい先生だし、きっと親身になってくれると思うから」とおっしゃったのだそうだ。このI先生も体育の先生なのだが、ぼくらに裸教育を強いたT先生は2年生からぼくらの体育の授業の担当で、I先生は1年の時のみだった。

今でも溜飲があがってくる思い出がある。1年生になってまもなく、運動能力測定がおこなわれた。ぼくは小学校の時から、これが一番憂鬱だった。ボールをどこまで投げられるかを測定する種目があって、ぼくは子供の頃からキャッチボールの経験すらなかったため、まともに投げる投げ方がわからず、10メートルのラインまですらとばすことができないのだ。女の子だって、10メートルくらいはやすやすととばせる。けど俺にはそれができない。でも、仕方がない。一瞬だけ恥をかけばいい。そう考えるしかなかった。皆、やすやすと18メートル、20メートル、あるいはそれ以上にとばしていった。ぼくのひとつ前のK君は10メートルぎりぎりのライン。さて、俺の番だ。案の定、ボールはとばなかった。「あれ、國友君、身体のわりにとばせないんだね」と脇で見学しているA君が悪気もなく言っているのが聞こえた。俺の方は、自分が情けなくて、泣きたい気持ちだったが、仕方がない。これで一番、苦手なことは終わった。ホッと一息だ。

そう思っていると、「國友君、I先生が呼んでいるよ」という他の男子の声。いやな予感がした。先生は少し離れたところから記録を

つけていたのだが、ぼくがあまりにもとばせないで、怪訝に思ったらしい。

「どうかしたんか？」

「いや、ちょっとさっきの持久走で疲れていたんで……」

「こういうボール投げみたいなのは、疲れているとかとは関係ないんだよ。そこまでは投げられないなんて！　しっかりしろよ！！」と予想していたとおおり、ぼくの自尊心を粉々に傷つける雷が落ちた。

K 君はぼくとそれほど変わらないのだけど、彼は身体が小さいから、投げられなくても、不思議には思わなかったのだろう。しかし、ぼくは身体がでかい。ふざけている。真剣にやっていない。先生はそう思ったらしい。「好きでできないわけじゃないよ。できない子ができるようにするのが教師の役目なんじゃないかよ」とぼくは心のなかでつぶやき、悔しさを押し殺した。ぼくのスポーツコンプレックスはますます根を張って行って、ぼくは体育の授業をさぼり始めた。

I 先生は、風紀係の先生で、全校集会などのたびにあれこれ風紀のことで説教する先生だった。根は悪い人じゃないことはわかっていた。善良で単純な人だ。裸教育を強いた B 先生のような極端な暴君ではなかった。ただ感情リテラシーに欠けている人だった。相手を厳しく威圧すれば、それでその子が矯正されると思っているのだ。今では、肉体的な暴力だけではなく、相手を威圧したり、叱責したりしても、場合によっては DV と見做される。この先生が俺に言ったことは、明らかに DV だった。しかし、当時は、誰もそのことに気づいていなかった。ぼくが T 先生の裸教育に耐えられず、心のバランスを崩していた頃、

この I 先生に相談していたとしても、I 先生がぼくのことをわかってくれただろうか。くれるわけがなかった。「男なんだから、裸になるくらいいいじゃないか。そんなことを恥ずかしがるな！他のやつは、皆たえているのに。男だろ！しっかりしろ！！」と雷を落とされるに決まっていた。ぼくは余計に傷つくことになるだろう。

しかし、担任の女の先生はそのことがわかっていないのだった。

人はそれぞれ、センサーやレセプターが違っているんだよ。同じ出来事を、全ての子が同じように感じ、同じように受容することができるのであれば、教育は簡単だけど、どうしても受容できない子は当然のことながら出てくる。前にある本で読んだけど、どうしても受け入れられないことを強いられたとき、「トラウマ」が生まれるのだ。

### 3. ウィルスのようないじめ

この女の先生が一生懸命だったことは、十分わかっていた。母も、「あの先生のことは悪く言っちゃダメよ」と言っていた。彼女はちょうど母と同じくらいの年代。まだ中高生の子供を 2 人も抱えていて、夫も教師だと言っていた。ぼくが 2 年の頃までは副担任だったのだが、2 年の時の担任だった F 先生が全体の主任になって、担任をおりざるを得なくなり、それで、その先生の言葉添えもあって、この先生が抜擢された。この先生としては、担任はしたくなかったらしい。家庭持ちの女性の先生だから、受験を控えた 3 年生の担任を引き受けるのは重荷だったらしいのだ。

ぼくは中 1、中 2、中 3 と年を追うごとに、

学校に行くことがきわめて苦痛になっていった。周りの男の子たちに同化できず、しかも、女の子たちの執拗な嫌がらせが続いていたのだ。ぼくのクラスの女子で、とりわけぼくを嫌っていたのは、クラスで最も優等生的な、クラスのお姉さんの存在の女の子だった。彼女はぼくの身体が彼女の机に接触すると、その度ごとに、そこをティッシュや雑巾で拭いたりしていた。しかも、わざとぼくが気づくような形の見えよがし(?)の嫌がらせである。ぼくは「気持ち悪い」存在なので、汚いから拭いているのよという態度を示して、ぼくをチクリチクリと傷つけようとしていた。

しかし、彼女は表向きは優等生。この女の先生は、ぼくが誰かにいじめられているのではないかと心配はしてくれていたのだが、まさか彼女の仕業だとは思わない。この女の先生だけではない。母だって、気づいていなかった。

先日、ある先生に聞いたのだが、今でも、いじめられる子は男の子に多く、いじめるのも男の子、被害も加害も男子なのだそう。しかし、これをいうとフェミニストからは怒られるだろうが、ぼくは女の子のいじめ加害も相当数あるのではないかと予想している。ただ、女の子の加害は表に出づらい。肉体的な暴力でもない。威圧でもない。ただ、「私はあなたを嫌いなよ」という態度を持続的にとり続けることで、相手の心に侵入し、相手の心の細胞を破壊していくウィルスのようないじめだ。それに男子は女子よりも強くなくてはならないと教育される。「男のくせに、女にいじめられるやつがあるか!」と言われる可能性もあるから、女子からひどいことをさ

れても多くの男子はそれを誰かに言うことはできないのである。仮に言ったとしても、男が女に迫害されるケースは、女が男に迫害される場合に比べると深刻には受け止めてはもらえない。男は強い、女は弱いんだから、女に迫害される男のほうが情けないんだという社会通念はまだ根強い。

まして、ぼくの体験は 35 年も前のことだ。ぼくは彼女の態度に深く傷ついていたが、それを訴えたからと言って、担任の女の先生は、理解してくれただろうか。この女の先生は、一生懸命だったけれど、女性だから女子の方に甘かった。というか、男の苦しみと女の加害性に気づいていなかったのだ。

#### 4. 体育教師の弱い者いじめ

当時のぼくは、なんかかんかで体育の授業をさぼっていた。I 先生にしても T 先生にしても、生徒の自尊心を傷つける、怒り方をすることを何とも思っていなかった。丁寧に教えてくれた上で、怖いのであればまだ許せるが、往々にして体育の先生たちは、ただ号令をかけているだけのことで、手とり足とりなんてことはいっさいしようとしなない。これを言うと、「体育だけじゃなくて、他の科目だって、苦手な子にはつらいじゃないの?」と言われそうだが、他の数学や国語、英語や社会や理科は、できない子はただ座って、先生の話の話を聞いているふりをしていればいい。しかし、体育の場合は、皆の前で恥をかかされる。かけっこなどの個人競技では惨めな思いを味わうし、サッカーやバレーのような球技では、できない子はチームの足を引っ張るから、いたたまれない気持ちになる。

しかも、なぜか、体育だけ、女子にハンデがつく。数学は男のほうができる人が多いと言われるが、ハンデはつかない。国語や音楽は、女子のほうができる子が多いと思うのだけど、男にハンデはつけてくれない。すなわち、他の科目は、男の方ができようが、女の方ができようが、それは個人差の問題。しかし、体育だけは、男の方ができて当たり前とされるのである。女子よりも体育ができなかったぼくは、体育ができないということの屈辱と男として欠陥品であるということの屈辱、二重の屈辱を負わされることになるのだ。そして、そういう二重苦の子をさらに追いつめる、心ない体育教師たち。こんな教師たちに反抗して、体育の授業をさぼることが、そんな悪いことなの!? あんたたちの方が、ずっと非人間的じゃないか。そう、俺は思っていたのだ。

幸い、体育教師は細かいことには鈍感な人が多い。俺がさぼっていても、気にも留めていない様子ではなかったのだから、俺はずっとさぼっていた。ところが、この女の先生は、そのことに気づいてしまい、裸教育のT先生にぼくが体育の授業に出ようとしないということをお話してしまった。公立の高校受験になると、体育や実技科目の成績もかかわってくる。それで、「どうにか先生からも真面目になるように言ってあげてください」と言ったみたいだった。

そこから、T先生のぼくに対する執拗ないじめが始まった。それは、この原稿に書くのも忌々しいくらいの恐ろしいばかりのいじめだった。この先生は、弱い者いじめが大好き。担任の女の先生も愚痴っているのだから、それを口実にして、ぼくをいじめてもかまわな

いと思ったみたいだった。

体育の先生というのはある種独特の人種だ。当時、ぼくの中学で、一番生徒に馬鹿にされていたのは、国語の男の先生だった。この先生は今の言い方で言えば、天然みたいなのところがあって、点数は間違え、教え方は下手だし、授業中におならをしたりすることもあった。普段は温和なのだが、突然、切れると、生徒に何発もビンタを食らわせたりするので、生徒の陰口の的だった。音楽の男の先生も嫌われていたが、この人は嫌味だけど、殴ったりはしないからまあいいかと評価されていた。ぼくに言わせれば、国語の先生よりも、音楽の先生よりも、この体育の先生のほうが、はるかに残忍で冷酷な人だったと思うのだが、生徒たちは不思議と彼の悪口は言わなかった。

アメリカの作家・フィッツジェラルドの『夜はやさし』という小説に、トミー・バルバンというマッチョな男が出てくる。周りの男性は、彼が頭の悪い男だということを知りながら、なんとなく、彼をばかにすることができないのだというくだりがある。このくだりを読んだとき、まさしく体育の先生はトミーだと思ったものだ。頭の悪い男であるにもかかわらず、体育の先生を生徒がばかにすることができないのは、体育の先生は、男性度という点では誰よりも勝っているからである。男性的な威圧力を持ち、自分の優位性を盲信している男は、非人間的なことをしても、許されてしまうのだ。しかし、この先生がぼくにしたことは明らかに弱い者いじめだった。これは、先生が一番してはいけないことなんじゃないの? でも、先生には「いじめ」を「教育」という言葉で置き換える特権があるのだ。

思えば、ぼくが中学時代に男の子からいじ

められていたら、状況は変わっていたようにも思う。肉食系の男の子が弱い男の子をいじめることはよくあることだ。周りにも相談しやすかったろうし、何らかのかたちで、相手の男の子の方が罰せられていただろう。

しかし、ぼくをいじめたのは女の子と教師。女の子が男の子をいじめるはずがない。教師が生徒をいじめるはずがない。ぼくの受け取り方に問題があるのだという結論をつけられることは目に見えていた。そうなる则ぼくは余計に自尊心を傷つけられることになるだろう。それがわかっているから、ぼくは誰にも相談できず、一人で苦しみを続けて、自分の心を崩して行ったのだった。

こんなぼくにでも、大泉洋さんは「学校なんてどうでもいいんだよ。つまらないのはお前のせいだ」と言うのだろうか。そして、その台詞を聞いた女性は、「大泉さん、かっこいい！」とエールを送るのだろうか。

まだ不登校という言葉もない時代。そういえば、あの当時はまだ不登校はなかったが、家出少年少女というのが結構いた。テレビでも時々、家出した子を探す番組が行われたりもしていた。なかに、体育系の高校に通う女の子が、その厳しい上下関係にどうしても耐えられず、家出したというニュースがあって、ぼくは痛く共感したものだ。

彼女の場合は家出、ぼくの場合は不登校。そこまで子供を追いつめるまで、先生たちは気がつかない。深刻に考えてはくれない。周りが問題なのかもしれないということを……。

そういう時代だったのだ。

## 5. ビンタの興奮

先に名前をあげた S 君と N 君は確かにいいやつだった。ぼくみたいないじめられっ子にも偏見の目をもっていなかった。ぼくが高校に行かれなくなったとき、何度か 2 人で、ぼくの家まで来てくれた。しかし、ぼくは彼らに面会することができるような状況ではなかった。

ぼくは、心のなかでは S 君や N 君のような男子になりたいという願望はあったと思う。いつだって、明るくて、先生にもなついていくタイプ。先生から見ても、こういう子はかわいいはずだ。時にはやんちゃもするけど、不良というのではなくて、かわいい男の子だった。

今でも覚えているのは、中学 2 年生の時だ。

F 先生が担任の頃だった。ある朝、先生が朝、教室にやってくる頃、S 君や N 君も含めた男子数人が、黒板のところでふざけていた。教室に入ってきた F 先生は、このとき、2 人も含めて、その時、ふざけていた男子全員に 5 発ずつビンタをくらわした。

F 先生は学年主任の先生。古いタイプの男の人ではあったのだけど、人間味があって、中学になって会った先生のなかでは、この先生が一番好きだった。しかし、この先生は体罰を必要悪と考えていて、しかも、「殴るときには本気で殴らない」と思っているようなところがあった。この時のビンタも強烈なビンタで、最初に殴られたのは S 君だったが、彼の頬は一発ビンタが張られた時点で真っ赤になった。一発で終わるかと思っていたら、さらに 4 発続いた。左の頬にのみ 5 発だ。彼の左頬は真っ赤になった。F 先生は、「5 発ずつだ。席に着け」と S 君を解放すると、N 君も含めた他の男の子たちにもたっぷり 5 発ビ

ンタを浴びせた。

あの時、ぼくは変な性的興奮を感じたのを覚えている。ぼくは F 先生が好きだったし、S 君も好きだった。自分の好きな男の子が、自分の好きな男の先生からビンタをくらわされる。殴るという行為は、性交に似ている。軍隊など男ばかりの同性愛的な組織で、ビンタがしばしば行われるのは、一種の性交なのである。ぼくは、あの時、S 君や N 君と並んで、一緒に F 先生からビンタされたかったんだと思う。嫌いな先生から殴られるのは嫌だが、F 先生は好きだったし、好きな S 君や N 君と一緒に殴られるとなれば、ひとつの青春時代の思い出になっていたのかも知れない。

しかし、あの頃のぼくは、すでにジェンダーに囚われてしまっていて、男になることに拒絶反応を示し始めていた。女の子だったら、5 発もビンタを食らわせるなんてことは絶対にできない。男だからこそ、強いられることだ。何度か書いた裸教育に関しても、女の子が裸にさせられるなんてことは絶対にない。男だからこそ、強いられることだ。

なぜ、男だから……？ おそらくぼくが何よりも嫌悪していたことは、体罰でもなく、上半身裸になることでもなく、スポーツ教育でもなく、強制的に男にさせようとする権力だったのである。

そして、ぼくのジェンダーに対する反発は、学校が植え付けたものであることは間違いなかった。ここで語ったエピソードは、ぼくの体験のほんの氷山の一角だ。「男のくせに」「男だから」「男は我慢」「男の子は頑張らなきゃ」……こういう台詞をぼくは毎日のように聞かされていたのだ。ぼくを不登校まで追いつめた主犯は学校だったと確信を持って言えるの

である。

## 6. 中学生の魂、百まで。

その後、S 君と N 君は、地元の大学を出て、今でも地元にいると聞いている。2 人とも家業を継いでいるらしい。『アフタースクール』の大泉洋扮する先生も、母校の先生となったという設定になっている。しかも人のよい教師という設定になっていて、S 君や N 君に似ているとも言える。『アフタースクール』というタイトルは、放課後という意味もあるだろう。大人になった男 3 人のドラマなので、3 人の大人の男が 3 人の男子中学生のメタファーということなのだろう。その一方で、学校を終えた後、すなわち、3 人の男の子が大人になった後という意味もこめられているように思う。

ぼくは 19 歳の時に京都の大学に入って、その後は、絶対に故郷には帰らないと生きてきた。過去を封印してしまうために。やはり、俺には S 君や N 君のような人生を歩むことはできなかったのだ。「中学生の魂、百まで」だなあ。

あー、また同じことを書いているなあ(笑)。

もう連載も 10 回目となって、少しは進歩しなくてはならないと思っている。なのに、ぼくはまだ過去のトラウマの周りをぐるぐる回っている。ぼくの愚痴を聞いてくれる年下の友達からも言われる。「國友さんの話って、いつだって、中学の時のことばかりですよね(笑)」と。「それくらい俺にとっては大きなトラウマだったんだよ。俺にとっての広島・長崎なんだから(笑)」とぼくは答える。

実は今、『アフタースクール』の DVD を借りている。嫌いな映画だけど、もう一度見て

みようかと思っている。おそらく内田監督が訴えたいことは、「先生には問題がない、生徒本人の責任だ」というような、30年以上前の古い教育観ではないはずだ。全体の文脈をはっきりと把握すれば、違ったドラマとして受け入れられるだろう。映画はすべてをまんべんなく描くことはできない。『アフタースクール』はあくまで善良な教師を主人公にしているけれど、『告白』(2010)や『悪の教典』(2012)のように、先生を不気味に描く映画もたくさん存在するのだ。

S君やN君の目から見た学校と、俺の目から見た学校は、まったくの別物だった。それだけのことに過ぎない。S君やN君のように一生、故郷から離れずに生きる人がいてもいい。でも、俺みたいに故郷に背を向けて、他の町で一生を終える人もいていいよね。

この原稿がアップされている頃には、ぼくはもう50歳だ。50にもなると自分が生まれてきた宿命がわかってくる。もう俺は一生、京都で暮らすだろうなあ。中学の時のトラウマは一生、消えないだろうなあ。ジェンダーへのこだわりもなくなることはないだろうなあ。でも、そういう自分でいいんだと思わなくてはならない。

人間はひとつの人生しか生きられないもの。自分に与えられた運命が宿命だったんだと悟ること。それがぼくの人生目標だ。

男は痛い！という気持ちも一生、変わらないと思う。だけど、ぼくは不思議なことに女に生まれ変わりたいとは思わない。次に生まれてくるとしてもやはり男に生れたいなあー。結局、ぼくは痛いのはつらいと思いつつも、痛いのが好きなのだ(笑)。